

# 剣と魔法と超変身！

風峰 虹晴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神器「アーケル」を持った少年とその妹の少女が魔法を使って頑張る

# 目次

E P I S O D E	E P I S O D E
2	1
9	1



## E P I S O D E 1

俺の名前は空代くうだい。雄我ゆうが。えーつと：特にないです！（困った時のサムズアップ）

現在の時刻はA・M 6：45。だらしないうちの眠り姫を起こしにきている。

俺はまず膨らんだ布団を揺さぶる。少し動くも反応なし。

「起きろ、起きなければ朝食は抜きだと母さんが言っていた」

次に俺がそう言っていると、布団がひとりでモゾモゾと動き、そして布団がめくれる。

寝起きでボサボサの長い黒髪に、一般的には非常に整った顔立ち、そして膨らんだ胸部とそれを抑えるように着ている白に水色のラインの模様のパジャマ。

俺の双子の妹、空代くうだい。雌鶴しじゅは寝起きのおっとりとした目をパチパチと瞬きし、欠伸をしながら体を伸ばす。

「ああ……おはよう、兄さん」

「おう、とりあえず身だしなみ整えろ。入学式今日だぞ」

「ふあ……」

雌鶴は再び大きな欠伸をしながらベッドから立ち上がり、部屋を出て行く。

俺も雌鶴と一緒に部屋を出る。ここは雌鶴の部屋だ。昔から出入りしていたとはい

え、年頃の男子が、年頃の女子の部屋にいるのはどうかと思う。

俺は既に制服に着替えている。自分の部屋に戻り、自分の荷物に忘れ物がないかのチェックをする。初日から忘れ物は避けたい。非常に！

——コンコン

チェックを終え、満足していると部屋のドアが叩かれる。

「兄さんいい〜?」

「いいぞ」

ドアの向こう側から声が聞こえ、返事をする、ドアノブが回されドアが開かれる。

そこに立っていたのは、ボサボサだった黒髪は整えられて綺麗なストレートロングになっており、服は俺の着ている服とは違ったデザインが使われており、ブレザーに〈金絹〉が使われ、ところどころにある刺繍には〈宝石糸〉が、金属部分には貴金属を織り交ぜた〈流体的な模様金属〉が使用された、錬金術を惜しみなく使った高級感溢れる制服だった。

「どう?」

「ん、いいと思うぞ」

「んふふ〜」

雌鶴は嬉しそうな声を出しながらふにやつと顔を柔らかくする。

「それにしても雌鶴が〈謎痕〉<sup>エニグマ</sup>授かるとはな」

「……私は〈魔技科〉じゃなくて兄さんと一緒に〈剣技科〉で頑張りたかった」

その言葉を聞き、俺は雌鶴の頭に手を乗せる。

「いいんだよ、お前も俺と同じ選ばれた人間になつてくれたんだ。俺は嬉しいよ」

優しく頭に乗せた手で雌鶴を撫でる。雌鶴は渋々といった感じで、大人しく俺に撫でられる。

空代家には魔法というものが生まれてから15年、誰も使うことなく保存されていたものがあつた。

俺、空代 雄我は、それ選ばれた男だった。

今朝は少し寒く、その冷え込みからか霞が出ていた。

俺と雌鶴は青い魔力光を放ちながら高速で走る、〈魔光列車〉に乗っていた。

魔光列車の車体には錬金術で生成された新金属〈ミスリル〉が使われていて大きな軽量化がなされており、それに加え運転手の〈念動魔法〉サイコキネシスによって車体の運動の補助と慣性の操作が巧みに行われ、入り組み速度が出しにくい路線でも新幹線並みの速度で運行されていた。

250km/hという速度まで一瞬で加速する上に、停車する際は軽量化された車体に巧みな念動魔法により、音もなく瞬間に停車することを可能としている。

ミスリスの量産がまだ可能ではないため数は少なく、その運行も東京市内での試験運用にとどまっているらしい。

「雌鶴、そわそわするな。俺も落ち着かぬ」

「むーりー」

雌鶴は体を小刻みに動かしながら、高速で移り変わる景色を眺めていた。

俺も窓際ではない席から外を眺め続けていると、目的の駅である〈騎士学院前駅〉に到着した。

「ほら雌鶴、降りるぞ」

「えー、もうちょつと」

「馬鹿かお前」

「あー引つ張らないでー!」

窓を眺め続けている雌鶴の襟を掴み、無理矢理立ち上がらせて外に出る。慈悲はない。

俺と雌鶴は目的地である国立騎士団カリアティドに向かって歩いていった。

15年前、ひとりの錬金術師によって生み出された〈賢者の石〉を頭の中に埋め込まれた人々は、魔法の力に覚醒した。

魔法とは人の心や精神力を魔力エナジーに変えて、使用することができる。

魔力によりバリアは、攻撃魔法か、魔力を帯びた魔法剣以外のダメージを、完全に無効化してしまう。

故に、世の中は〈剣と魔法の時代〉に移り変わり、国の治安や平和を守る警察や自衛

隊は〈騎士団〉へと変化した。

俺達の入学する国立騎士学院キャリアイドは、将来〈騎士団〉となりえる少年少女達を養成する学校だ。

「兄さん、〈あれ〉の調子は怎なの？」

「ん？特に異変はないぞ」

俺は腹を叩きながら雌鶴にそう言う。雌鶴は質問した時の少し強張った表情から、少し安堵したような表情に変わる。

「はあ……」

「どうした？」

「兄さんと一緒に剣技科に行きたかった……」

「謎痕を授かった限り、魔技科への入学が義務付けられてるんだから」

「うう……」

人の心に広がる深層心理の、その奥底には、異世界に通じる扉が存在する。

人の心や精神力は、この異世界に繋がる扉〈心の門ゲート・イド〉を通じて、異世界から肉体に流れているものだった。

魔力という人智を超えた力を手に入れた人類は、それを感じ取ることができた。

全ての人類はこの異世界に繋がっており、非物質的な異世界は〈歪界アストルム〉と名付けられ

た。

歪界には膨大な魔力が渦巻いており、そこには人格を持った思念体が潜んでいた。彼らは人類と接触すると、人が眠っているときなどに歪界から夢へと浮かび上がり、語りかけてくるようになった。

そんな彼らと契約し、彼らをこちらの世界に呼び寄せる魔法こそ、召喚魔法。

彼らは驚くべきことに、人類が語り継いできた神話に登場する神や悪魔と同じ名前、容姿を持ち、ゆえに神魔と名付けられた。

神魔の力を借りた召喚魔法は、普通の魔法と比べ遥かに強力であった。

謎痕という形で神魔に選ばれた者は、魔技科への入学が義務付けられ、国家の厳正な管理の下で〈契約の儀式〉を行うことによって、〈謎痕〉は〈ステイグマ聖痕〉へと変わる。

召喚魔法という力は強大で、反感を買えばかなり危険なことはわかる。

だから国は、そんな強大な力を管理するために、魔技科への入学が義務付けられているのだ。

「あー！今まで兄さんと一緒に修行してきたのにー！」

「あーはいはい落ち着け」

飛びかかってくる雌鶴を俺は紙一重で躲す。躲された雌鶴はこちらを向いて恨めしそうな表情で俺の顔を見つめる。

「それに、全く会えないわけじゃないだろ。剣技科と魔技科の生徒がチームを組んでヘクエストに挑むことが多いって説明会でも言ってたろ」

「そうだけど〜」

「ほら、とつとと行くぞで」

俺は雌鶴の手を掴み、学院に向かって歩き始める。雌鶴は「あー待ってー」と言いながら俺に引つ張られる。

登校時点でこんなにグダグダしてて、大丈夫だろうか……？

## E P I S O D E 2

雌鶴に構いながら歩いていると、いつの間にか霞は晴れており、俺の視界に学院が姿を現した。

石造りの校門が目の前にそびえ立ち、両側にリボンの花壇で装飾されている道が真っ直ぐに伸びていて、その先には噴水が勢いよく噴き出していた。噴水のある広場から左側には、レンガ造りの館や尖塔が建ち並んでおり、レンガのクラシックな風合いからは、魔法使いたちの学び舎という感じがする。

逆方向の右側には、木造の和風建築が密集しており、左側の魔法使いの学び舎とは打って変わり、剣士たちの学び舎という感じがする。

魔法科と剣技科。その違いがはつきりとわかるように二分割されていた。

「うん、見れば見るほど壮観だな」

「そうだね。兄さんと一緒の科だったら尚よかつたなあ〜！なあ〜!!」

「うっせえそろそろ静かにしてろ!」

校門でしみじみとして学院を見ていると隣の雌鶴が余計なことを言うので、俺は雌鶴の両ほっぺを摘み、引っ張る。

「あく引つ張らないで〜!」

「よーしならもう戯言は言わんな?」

「それはどうかな!」

「アホか」

雌鶴の無駄に柔らかくて触り心地の良いほっぺをによーんによーんと引つ張る。その度に雌鶴が「あくあく」と声を漏らす。

別に雌鶴のことは嫌いではない。一応。一応。(大事なことなので r y

ん?)

そんなくつだらないことをしていると、俺の体が何かを察知する。

遠いところ……学院の中……?で……何かが渦巻いているかのような感覚。

「どうしたの? 兄さん」

どうやら雌鶴は気づいていない。

雌鶴は魔法については結構な才能を有している。通常魔法は〈念動魔法〉〈念焼魔法〉〈身体能力強化魔法〉〈知覚力強化魔法〉〈精神感応魔法〉の五系統に分けられている。

雌鶴はこの五系統全てが他の人間より優れており、生まれついてから決まっている魔力も非常に多く、魔法使いの才能に溢れていたのだ。

しかし、俺は少し違う。生まれつき魔力も特別多いわけではないのに、〈念焼魔法〉

〈エンチャント・オーラ身体能力強化魔法〉〈エクストラ・センス知覚力強化魔法〉の3つが、何故か発達している。

原因はわかっている。この腹の中にある物体のせいだ。というか、男である俺にこんなことができるのは、これのせいしかありえない。

「ごめん、ちよつと行つてくるわ」

「え？」

俺は脚に凝固した〈エンチャント・オーラ身体能力強化魔法〉を纏い、一気に駆ける。

これは俺の独断と偽善的な正義感からの行動だ。何かあつたら困るので、雌鶴を巻き込みたくはない。

「はあ……しゃあねえ」

俺は走りながら下腹部に両手を添えた。

◆？

魔技科の敷地の外れに広がる英国ガールズ式庭園デデン。そこで1人の剣技科の男子生徒が、魔技科の制服を着た女子生徒2人に絡まれていた。

「なんで剣技科のあんたが私達魔技科に道を譲らないわけ!？」

「劣等種の剣技科が、『ステイグマ聖痕』を得た私達に道を譲るのは当たり前でしょ!？」

「そんなの関係ないだろ!？」

「うるさいなあ……!？」

魔技科の女子生徒2人は、呪文を唱え始める。その行動に剣技科の男子生徒が怯えた顔をする。

「おりやあああああ!？」

「「!？」」

そこに、1人の乱入者が現れる。

その乱入者は、人の形をした、人ではない生物だった。

顔は仮面のように無機質で、表情が分からず、青い目と額に2本の角を持ち、体には青く、なるべく面積を減らした鎧に、青い石がはめ込まれているベルトを腰に巻き、両手で青く奇抜なデザインの手持棒を持った、戦士だった。

呪文を唱えていた女子生徒は、突然のことで集中が途切れ、召喚魔法は中断された。

「ま、魔獣!？」

「そんなわけではない!学院の中に〈魔境〉ができるわけではない!」

3人の生徒達は、謎の乱入者に軽いパニックを起こす。

「お前ら、こんなところで平気で召喚魔法を使うな」

青い戦士は男子生徒と女子生徒の間に入り、女子生徒2人の方を向いてそう言い放った。

「うっさい!…あんたも纏めて片付けてやる…!」

女子生徒2人は目の前の2人に向かって呪文を唱え始める。片方は赤、そして片方は緑の光を放ち始める。

「はあ…なるべく穏便に済ませて戻りたかったんだが…」

戦士は左手を腰に添え、その上に右手を重ねる。そして両手を開き…

「超変身!」

腰に巻かれたベルトの青い石が色を変え、赤く変わる。それと同時に目は赤く、鎧は形を変え、肩にも追加され、赤くなる。手に持っていた棒は姿を変え、剣の形になっていた。

「これ持つててくれっ!」

「えっ? ああ…」

ほいつと投げられた剣は後ろの男子生徒に投げられ、赤い戦士は走り始める。

赤い戦士は速かった。一瞬で接近し、そして素手で赤い光を放つ女子生徒を殴った。

「きゃあっ!」

本来なら召喚魔法、魔法剣でしかダメージを与えられない防衛魔力が青い光を発しながら飛び散る。その威力は並大抵の魔法剣よりも大きかった。

殴られたことにより集中が途切れ、反動で後ろに下がった女子生徒に、更に対空の飛び蹴りが襲いかかる。

「我は汝の名前を知っている。汝の名前は、アンドロマリウス…」

緑色の光を放っている女子生徒は呪文を詠唱する。

「はあっ!」

しかし赤い戦士は低空の蹴りの反発で接近し、後ろ蹴りを食らわせる。青い光が飛び散り、吹っ飛んでいく。

「おわあ!?!なんか凄いことになってるよ!?!」

すると、2人の生徒が駆けつけて来た。2人とも剣技科の制服を着た男女だった。

「うへえ、伊織、俺は会長を呼んでくるから頼んだぞ!」

「ええ!?!ちよつと寅蔵待つてよ!」

男子生徒の方は一直線に校門の方へ走っていき、それを見た片方の女子生徒は慌てた様子を取る。

「…正体がバレるとめんどくさいし、後は任せるか。超変身!」

赤い戦士は再び青い戦士に身を変える

「これ、あんがとさん!」

「ああ…?」

預けていた剣を取ると、高い跳躍力と素早さを生かし何処かへ去っていった。しまった。

「な、なんだったんだろうあれ…。ともかく、さっきのことについて聞かなきゃ」  
残された方の女子生徒は腰に下げていた剣を抜き、女子生徒達と接触する。